

# 卒業論文・修士論文・博士論文

～ 成城大学への就職の前後 ～

齊藤 昭雄

慣例によって出していただくことになったこの古稀記念論文集に何か書いてみませんか、という申し入れを編集委員の先生から受けて、勝手ながらこのようなタイトルで拙文を載せていただくことにした。

私にとって、タイトルにある時代は、文字通り人生の大きな転換期であった。46年もの長い間過ごすことになった成城大学の経済学部は、これまでの人生の大半を過ごした場所でもあり、それもこれも、発端はいわば偶然に入った神戸大学への入学であったように思う。

## ・ 神戸大学入学

私の出身高校は茨城県の水海道第一高等学校と言い地元にある典型的な田舎の高校であった。高校二年の文化の日に父親が脳溢血で倒れ、学校で軟式テニスの地方大会に出ていた私は弟にその知らせを聞いて自宅に駆け戻った。こうなっては私で何代目かになる米屋を継ぐしかないと覚悟を決めた。倒れた父の代わりに早速家業をやらざるを得なくなって、当然のことながらテニスを続ける余裕はなくなったけれど、精米と米の配達はそれほど重労働ではなかった。ただ、いよいよ一生の間で学校に通えるのは残り1年余りの高校生活しかないという思いは、強く心に響いた。田舎の高校ではあったが、一応文系と理系に分かれた進学コースがひとクラスずつ設けられていた。その理系のクラスに入れてもらって最後の勉強をするということに私の迷いはなかった。

そういう状況が半年ほど続いたころ、幸い父の体もずいぶん回復してきた。そして最終学年の夏休みに入る前に、両親から思わぬことが告げられた。「そんなに勉強がしたいのなら、現役で入れるなら大学に行ってもいいよ」と。人生最後の機会という思いで勉強に精を出していたことが、両親にはそんな反応をもたらすことになった。受験など全く考えていなかったもので、その時になってあわてて考えざるを得なかった。現役で合格できることなど自信はなかったけれど、自分程度の理数系への興味では、工学部などを目指すよりも商業とか経済の分野と定めて、数学や物理で受験できる大学を探した。一応理系の進学コースに籍を置いていたので、数学（数）と物理は週に9時間ずつ授業があった。だからそれらの科目は受験のために改めて取り組まなくてもいいような気がした。幸い文系は理科があっても大抵1科目で、化学や生物が好きではない私には幸いした。ただ、経済学部や商学部で、国語・数学・社会・理科・英語の5教科全部を試験科目にしているところは全国的にも数えるほどしかなかった。もちろん私立大学では皆無と言ってよかった。幸い当時は国立大学が1期校と2期校に分かれていたので、それぞれから少しでもチャンスがあるところを選ぶことになった。その結果願書を出した学校が神戸大学と小樽商科大学という、地理的には南北に遠く離れたところになってしまった。

私は小さいころから健康にはとても恵まれていて、私の記憶では、小学校2年の時に1度学校を休んだきり、高校3年の2学期まで、学校を休んだことは1度もない。その結果、入試目の高校3年の3学期は、期末試験だけを受ければあとは休んでもいいという許可を学校から受けることができた。その間の私の受験勉強は、ほとんどの時間を日本史と世界史という私の最も苦手な受験科目に充てることになった。

受験の結果は、自己採点ではその社会の2科目が1番よくできたのではないかと思う。かくして2期校は受験しないまま、まさかの神戸大学の経営学部に入ることになった。そこに入ったことが思わぬ幸運を呼んでくれ

た。まず第1は、そこがわが国最初の経営学部であったこと。第2に、入学した年の前年の昭和33年には坂本藤良の『経営学入門』が、そして大学院に進むことになった昭和38年には、占部都美の『危ない会社』がベストセラーになって100万部も売れたと喧伝されるほどの経営学ブームに遭遇したことなどである。

## ． 卒業論文

山下勝治先生の会計学のゼミに入った年に、一橋大学で開かれた「処分可能利益」に関する三商大対抗ゼミナールに参加して、剰余金問題に興味を覚え、卒業論文は「剰余金の分類」という題で、400字詰100枚ほどのものをまとめた。その体験が、成城大学でのゼミナールでも、「100枚は書いてください」という要求を生んだ。ただし、そのうち30枚分は自由作文でいいということにした。私にとっては、正直に言ってこの30枚の部分でゼミ生のいろいろな側面を発見することになって、ひそかな楽しみにもなった。

私の卒業論文の中核となる部分は、資本剰余金と利益剰余金との境にある、工事負担金や国庫補助金・債務免除益などの贈与剰余金や保険差益などのいわゆる「ボーダーライン・アイテム」と言われる項目についての検討であった。中でも指導教授の山下先生とは異なる結論になってしまった「保険差益」についての中間発表をした時の、冷や汗ものあのゼミでのシーンは、今でも鮮明に思い出す。その日の発表は私一人。先生からの話が終わった後、時間は十分に与えられていたが、私は無謀にも、先生の結論とは違うところに的を絞って20分程で発表を終えてしまった。要点は、「保険差益は2つの要素を含んでいて、貨幣価値変動に伴う部分は投下資本の修正に当たるので資本剰余金であるが、個別物価の変動に当たる部分は利益剰余金ではないか」というものであった。目をつぶってじっと聴いていてくれた先生がなんとおっしゃるのか、はらはらドキドキであったが、

先生はひとことだけ「そういう考えもあるね」とおっしゃっただけであった。そんな考えとっくの昔にお見通しで、特に論評に値しないと思われたに違いない。今にして思えば、「理論的に正しいことよりも計算確実なものが優先する」という会計独特の特質をも踏まえて議論を展開していなかった私の見解を、底が浅いと思われたのかもしれない。つまり私の議論は、ならば2つの要素をどのように分離するのかという議論にまで至っていないからである。やはり冷や汗ものであった。

このころには家業は弟が継いでくれることになり、父も元の健康体に戻っていて、私は幸い大学院に心おきなく進めることになった。

## ． 修士論文

卒業論文作成を通して、剰余金、つまり資本会計の分野への私の関心が高まったために、大学院では、名著の誉れ高い『資本会計』という著書を著した丹波康太郎先生のゼミに籍を置くことになった。進学早々先生はとりあえずこの本を読んでみてはどうかと言って、出版されて間が無いアントンの『資金フロー会計』(Hector R. Anton; *Accounting for the Flow of Funds*, Houghton Mifflin 1962)を渡された。それは資金会計という分野に関する最新の本格的な学術研究書であった。内容の充実さと巻末の参考文献の豊富さは、直感的にこの本を土台にして修士論文を書いてみようという気にさせるに充分であった。

その結果、その本をほぼ全訳し終えた夏休み前には、当時少しずつ関心を深めつつあった「資金計算書」を修士論文のテーマにすることに決まった。そのあとはもっぱら前述の巻末の参考文献を可能な限り手に入れて読み進めることになった。また一方では国内での議論も、著書や論文を中心に、可能な限り目を通すことに心がけた。そういう経過を経て、修士論文のタイトルが「資金計算書の検討 その統一化のために」に決まった。その内容は、従来の議論を整理する第1部と、自らの提言を披瀝するため

の第2部という、2部構成にすることにした。それぞれがさらに、資金概念、資金計算書の作成方法および資金計算書の内容という3章ずつに分かれたのは、形式的にはまずまずであったが、内容的に2つの点で行き詰ってしまった。

「現金」という最小の資金概念からその範囲を次第に大きくしていくと、ついには全財務要素あるいは貸借対照表のすべてということになる。そうなるドイツの運動貸借対照表そのものにたどりついてしまって、3つ目の財務諸表ということ念頭に置いた議論とはどう見てもしっくりこない。そのあいまいさが、突然パッと霧が晴れたようになったのは、10月のある日ゼミを終えてキャンパス内を歩いている時であった。この時初めて、プールとしての資金（つまり現金や流動資産などのまとまった具体的な資金）と全財務要素というのは異質なものであり、プールとしての資金概念をとる限り、小さくすればするほど資金取引として計算書に入る項目が限定されてしまうことがはっきりとイメージできた。たとえば資金を現金や流動資産とすると手形の更改や転換社債の転換などは計算書から除外されてしまう。また、一般に資金概念として支持を集めていた流動資産を資金とすると、売れ残りとしての商品などの棚卸資産が増えると資金が豊かになったということになってしまうということもその頃ははっきり理解できるようになった。

もう1点行き詰ったのは、資金計算書を財務諸表のひとつとして考える以上、簿記的に、損益計算書や貸借対照表のように誘導されなければだめではないかという思いであった。この点は最後まで悩みのタネであったが、ついに修士論文の提出期限までには解決できず、私の修士論文は第2部の第2章が空白のまま、「ここは今後の研究にゆだねたい」という一文だけが添えてあるという極めて変則的なものになってしまった。後でわかったことだが、この点についてはかの黒澤清先生も思いめぐらせ、私の慶應での恩師山榎忠恕先生も、『『資本維持』考 試論 会計理論再検討のう

ち」（『三田商学研究』第8巻第6号）などを通してかなり熟考されたようであるが、結局十分な結果を導くには至らなかったテーマでもあった。

この修士論文は、後に慶應の博士課程に進んだ時、兼任講師として来ておられた黒澤清先生に要旨を発表する機会があり、幸いにも「資金計算論 資金概念をめぐって」というかたちで2回に分けて『會計』に載せていただくことになった。ただ当時の慣行として、大学院の学生の論文は雑誌『會計』では「資料」扱いであった。そのために本誌末尾の私の「著書・論文・研究ノート等」のところでは、「論文」と「研究ノート」の間に特別に載せていただくことにした。

## ． 博士論文

東京オリンピックが開催された昭和39年の10月に、学内選考で博士課程への進学が決まった。それと前後して、就職の話も始まった。前述の通り当時は経営学ブームが全盛の頃で、会計学という、経営学の中心からそれているような学問の世界でも、まさにMBAがもてはやされつつあった。その頃非公式に神戸大学の東京事務所的な存在であった千倉書房（六甲台の3学部先生方の学術書が多く千倉書房から刊行されていた）の千倉孝氏（当時成城大学経済学部の学部長をしておられた内田直作先生のゼミの卒業生）から、神戸大学に、「成城大学で会計学担当の伊藤正一先生が定年退職（確か65歳）をされるので後任を探している」という話があったらしい。そこで茨城県出身の私に話が回されたようだ。

当時、経済学部の経営関係の専任としては、伊藤先生のほかに経営経済学担当の神田脩一先生、商業学の深見義一先生、交通論の岡田清先生それに入られたばかりの管理会計論の森清先生ぐらいしかおられなかった。そういうこともあって、1号館の一隅にあった経済学部の控室での面接はほとんど神田先生おひとりというありさまで、とても面接試問などと言えるものではなかった。幸いなことに神田先生や学部長その他の先生方の温か

いご配慮によって（もちろん教授会の承認があったことと思う）、経済学部への就職が決まるとともに、週に3コマ講義をしながら博士課程に行ってもいいということになった。神戸大学なら既に博士課程への進学が認められていたことや、オリンピックに合わせて新幹線も開通していたこと、さらには博士課程は週に1度だけ学校に行けばいいことなどから、神戸に通うことも考えられた。しかし結局は、彦根高商時代の山下勝治教授の一番弟子で、神戸大学でも山下先生から指導を受けた山柘忠恕先生がおられる慶應義塾大学で研究を続けたらどうかという山下先生のアドバイスに従うことになった。それからのフランス語の受験勉強は短期決戦で、当時フランス人による経営学書の中で最も注目されていた Jules Henri Fayol; *Administration Industrielle et Générale* を翻訳するという対処した。

慶應の博士課程での研究テーマについては、その頃フランス会計について研究する人があまりいなかったことから、とにかく会計に関するフランス語の新しい書物を読んでみるようになった。最初に手にしたのは、J. メイエールの『企業会計と国家会計』(Jean Meyer; *Comptabilité d'Entreprise et Comptabilité Nationale*, Dunod 1962) であった。これがなんと偶然にも「純粋会計論」と言われることになったフランスの新しい会計学説を代表するものであることが次第に明らかになってきた。「純粋経済学」や「純粋法学」など（もちろん中山伊知郎著『純粋経済学』を読んでみたりケルゼンの「純粋法学」に関する文献にもあたってみたりした）に対抗する意図が働いていたのかどうかかわからないけれど、企業会計のみならず社会会計も含めて会計というもののすべてを念頭に置いた議論を展開しようとしているという点で、山柘先生が考えておられる「あるはずの（「ある」でも「あるべき」でもない）会計」を自分なりに考えるうえで格好の手がかりになるような気がした。この本にも巻末におびただしい参考文献が掲載されていた。それらを可能な限り集めて読み進めることが、研究活動の中心になった。

「単位取得退学」ということが通り相場になっていた当時の博士課程で

あったが、慶應義塾ではたまたま私が通常年限の3年を終える時に、単位取得論文の提出が義務付けられた。私は「複式記入論小考 フランス純粋会計論の一断面」として400字詰120枚ほどの論文を提出した。それは幸い『三田商学研究』に載せていただくことになった。その上、それをさらに膨らませて、「フランス純粋会計論の研究」としてまとめてみてはどうかと、山榎先生に勧められた。

そういう励ましに支えられて、博士課程を終えた年の夏休み明けに400字詰500枚ほどの拙稿をまとめた。当時はワープロはなく、都合3部の原稿を手書きで清書するのは結構大変なことであったが、ともかく夏休み中に仕上げてみた。そのときたまたま先輩の小西滋人氏が、マーケティングの研究で学位請求をするということが判明した。それに合わせて私の論文も審査の対象にしてくれることになった。慶應の商学研究科では初めての博士号の審査であった。ここでも大いなる幸運に恵まれて、翌年の3月、学位取得がかなえられた。審査を何とか通過した論文を、今度は千倉書房が出版を引き受けてくれたが、その拙著は翌年の日本会計研究学会で太田賞（現太田・黒澤賞）受賞という榮譽にも浴することになった。その知らせが初めての海外研修で滞在していたパリに伝えられた時、会話もままならず経済的にも厳しく、そのうえ晩秋のどんよりとした、マロニエの枯葉が路上に舞う寂寞とした状況に、一条の光をもたらす出来事であったことを思い出す。

こうして振り返ってみると、私の研究・教育活動が数々の幸運に恵まれてスタートしたのだと、しみじみ思う。そして海外研修の機会をはじめ恵まれた研究・教育の環境を提供してくれた成城学園の厚意や同僚・学友・知人といった人々からの多くの支援には心から感謝したいと思う。

そういう思いを強くしながら、昨年定年を迎えたという次第である。



## 斉藤昭雄名誉教授の歩みと著書等

### 歩　　み

- 昭和 16 (1941) 年 3 月 9 日 茨城県結城郡水海道町(現常総市)に生まれる
- 昭和 22 (1947) 年 4 月 水海道町立水海道小学校入学
- 昭和 28 (1953) 年 4 月 水海道町立水海道中学校入学
- 昭和 31 (1956) 年 4 月 茨城県立水海道第一高等学校入学
- 昭和 34 (1959) 年 4 月 神戸大学経営学部入学
- 昭和 38 (1963) 年 4 月 神戸大学大学院経営学研究科入学
- 昭和 40 (1965) 年 3 月 経営学修士(神戸大学)
- 昭和 40 (1965) 年 4 月 成城大学経済学部助手
- 昭和 40 (1965) 年 4 月 慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程入学
- 昭和 42 (1967) 年 1 月 5 日 浅野幸子と結婚
- 昭和 43 (1968) 年 3 月 慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程単位取得
- 昭和 44 (1969) 年 3 月 商学博士(慶應義塾大学)
- 昭和 44 (1969) 年 4 月 成城大学経済学部専任講師
- 昭和 45 (1970) 年 9 月 フランス国家会計審議会にて海外研修(～翌年 8 月)
- 昭和 45 (1970) 年 11 月 日本会計研究学会太田賞受賞
- 昭和 46 (1971) 年 4 月 成城大学経済学部助教授
- 昭和 47 (1972) 年 4 月 慶應義塾大学兼任講師(～昭和 54 年 3 月)
- 昭和 47 (1972) 年 9 月 日本会計研究学会スタディ・グループ「戦後わが国会計学の発展に関する調査」に参加(～49 年

9月)

昭和52(1977)年 4月 成城大学経済学部教授

昭和52(1977)年 7月 フランス国家会計審議会にて短期海外研修(～9月)

昭和54(1979)年 4月 経営学科主任(～58年3月)

昭和55(1980)年 4月 大学院経済学研究科教授

昭和61(1986)年 4月 成城学園創立70周年記念行事・式典委員長

昭和61(1986)年 5月 大学院経営学専攻主任(～平成2年4月)

昭和62(1987)年 4月 杏林大学社会科学部(現総合政策学部)非常勤講師(～平成22年3月)

昭和63(1988)年 7月 フランス国家会計審議会にて短期海外研修(～8月)

平成6(1994)年 9月 海外研修ならびにトゥルーズ第 大学客員教授(～翌年9月)

平成8(1996)年 9月 日本会計研究学会特別委員会「連結会計基準の国際的調和」に参加(平成9年度科学研究費補助)(～平成10年9月)

平成9(1997)年 2月 イギリスおよびベルギーに資料収集の旅(～3月)

平成13(2001)年 8月 フランスおよびベルギーに資料収集の旅(～9月)

平成14(2002)年 9月 日本会計研究学会スタディ・グループ「各国プラン・コンタブルの比較研究」に参加(～平成16年9月)

平成17(2005)年 4月 杏林大学大学院国際協力研究科非常勤講師(～平成22年3月)

平成23(2011)年 2月 5日 最終講義「学問のすゝめと会計学」

平成23(2011)年 3月 31日 定年退職

## 著書・論文・研究ノート等

### 〔著書〕

- 『フランス会計理論 フランス純粋会計論の研究 』（千倉書房・昭和44年）  
『フランス会計制度論 1982年版プラン・コンタブルの研究 』（千倉書房・昭和63年）（成城大学経済学部研究叢書第21号）

### 〔共編著〕

- 『会計学の基礎』（藤井達敬との共編著）（第三出版・昭和63年）  
『会計学の基礎知識』（藤井達敬との共編著）（東京経済情報出版・平成2年）  
『会計学の論理』（藤井達敬との共編著）（東京経済情報出版・平成6年）  
『会計学の論理〔新版〕』（藤井達敬・千葉洋との共編著）（東京経済情報出版・平成12年）  
『会計学の基礎〔新装版〕』（藤井達敬・千葉洋との共編著）（東京経済情報出版・平成16年）  
『会計学の基礎〔第3版〕』（藤井達敬・千葉洋との共編著）（東京経済情報出版・平成19年）

### 〔論文〕

- （卒業論文）「剰余金の分類」（昭和38年1月提出）  
（修士論文）「資金計算書の検討 その統一化のために」（昭和39年12月提出）  
（博士論文）「フランス純粋会計論の研究」（昭和43年9月提出）  
  
「資金計算書作成目的と資金概念」（神戸大学『六甲大論集』第11巻第4号・第12巻第1号合併号）

- 「フランスに見られる貸借対照表動的化の試み」(『企業会計』Vol. 20, No. 4)
- 「複式記入論小考 フランス純粋会計論の一断面」(『三田商学研究』第11巻第2号)
- 「フランス純粋会計論生成の背景」(成城大学『経済研究』第27号)
- 「フランス純粋会計論の性格」(成城大学『経済研究』第28号)
- 「フランス純粋会計論の方法論的基礎」(成城大学『経済研究』第29号)
- 「プラン・コンタブル改正の一方向 プータン・デルゾルの提案をめぐって」(『産業経理』Vol. 30, No. 8)
- 「資金計算書の内容」(『成城大学経済学部創立20周年記念論文集』)
- 「OCAM プランの性格 プラン・コンタブル改正との関連において」(『會計』第103巻第1号)
- 「フランスにおける資金計算書の展開」(成城大学『経済研究』第55・56号合併号)
- 「付加価値税制の基本的構造とその企業会計的側面」(成城大学『経済研究』第57号)
- 「付加価値税制の会計技術的側面」(『税経通信』Vol. 32, No. 5)
- 「EC 諸国の会計制度の調和に関する若干の考察 ベルギーにおける新しい会計制度の展開に寄せて」(『産業経理』Vol. 38, No. 1)
- 「ベルギー会計法の成立とその意義」(成城大学『経済研究』第59・60号合併号)
- «La Comptabilité de l'Entreprise au Japon» *Revue Française de Comptabilité*, N°89. (en collaboration avec Professeur Jean-Claude Scheid)
- 「会計制度の国際的統一化の一面 EC 第4号指令の発効に寄せて」(『産業経理』Vol. 39, No. 2)
- 「フランスにおける財務諸表の新展開(1)」(成城大学『経済研究』第65号)
- 「フランスにおける財務諸表の新展開(2)」(成城大学『経済研究』第66号)
- 「フランスにおける会計制度新展開の一面」(『成城大学経済学部創立30周年

斉藤昭雄名誉教授の歩みと著書等

- 記念論文集』)
- 「『財産』の状態と『財政状態』 フランス会計制度の新展開に寄せて 」  
(『産業経理』Vol. 42, No. 1)
- 「プラン・コンタブルと財務諸表システム」(番場嘉一郎監修『フランス会計論 プラン・コンタブル研究』中央経済社・昭和57年, 所収)
- 「固定資産の貸借対照表価額 フランスの対応をめぐって 」(成城大学『経済研究』第77号)
- 「フランス会計の諸原則 フランス会計制度研究の一齣 」(成城大学『経済研究』第94号)
- 「山榭先生の会計学説 形成の軌跡 」(『三田商学研究』第29巻特別号)
- 「プラン・コンタブルの会計原則規定の性格」(成城大学『経済研究』第96号)
- 「フランス会計に見る『財産』の状態と『財政状態』」(『成城大学大学院経済学研究科創立20周年記念論文集』)
- 「損益計算書の構造に関する若干の考察 フランスの場合を手掛かりに 」(成城大学経済学部創立40周年記念論文集『経済と文化』)
- 「理念と制度の断層 会計の国際的統一化をめぐって 」(成城大学『経済研究』第122号)
- 「市場経済化に伴う会計制度の確立に向けて 中国会計の展開 」(謝道生との共著, 成城大学『経済研究』第127号)
- 「会計と法の間 フランス会計の質的特性の動揺 」(山榭忠恕教授13回忌記念論文集『現代会計の潮流』税務経理協会・平成8年所収)
- 「会計事象の実質をめぐって」(成城大学『経済研究』第136号)
- 「ジョイント・ベンチャーとコンソーシアムの連結をめぐって イギリスとベルギーの対応を手がかりに 」(成城大学『経済研究』第140号)
- 「ジョイント・ベンチャーの連結 イギリスの新展開に寄せて 」(成城大学『経済研究』第143号)
- 「IAS へのわが国の対応」(『税研』Vol. 15, No. 1)

「会計制度新展開の一面 退職給付会計を手がかりにしつつ」(成城大学『経済研究』第151・152号合併号)

「会計制度の行方 ベルギーの対応をめぐって(1)」(成城大学『経済研究』第158号)

「会計制度の行方 ベルギーの対応をめぐって(2)」(成城大学『経済研究』第159号)

「会計制度の行方 ベルギーの対応をめぐって(3)」(成城大学『経済研究』第162号)

「ベルギーのプラン・コンタブルの貸借対照表勘定の分類と機能」(南山大学『南山経営研究』第19巻第2号)

[資料]

「資金計算論 計算対象をめぐって(一)」(『會計』第91巻第3号)

「資金計算論 計算対象をめぐって(二)」(『會計』第91巻第5号)

[研究ノート]

「フランスにおける初期の純粹会計論」(成城大学『経済研究』第26号)

「OCAM プランの研究(1) OCAM 諸国の会計標準化の構想」(成城大学『経済研究』第37号)

「OCAM プランの研究(2) 貸借対照表関連科目の検討」(成城大学『経済研究』第39号)

「OCAM プランの研究(3) 損益計算の構造をめぐって」(成城大学『経済研究』第40号)

「プラン・コンタブルにおける勘定分類と各勘定の機能(1) フランス会計制度研究の一齣」(成城大学『経済研究』第74号)

「プラン・コンタブルにおける勘定分類と各勘定の機能(2) フランス会計制度研究の一齣」(成城大学『経済研究』第75号)

斉藤昭雄名誉教授の歩みと著書等

- 「プラン・コンタブルにおける勘定分類と各勘定の機能(3) フランス会計制度研究の一齣」(成城大学『経済研究』第76号)
- 「プラン・コンタブルにおける勘定分類と各勘定の機能(4) フランス会計制度研究の一齣」(成城大学『経済研究』第90号)
- 「プラン・コンタブルにおける勘定分類と各勘定の機能(5) フランス会計制度研究の一齣」(成城大学『経済研究』第91号)
- 「ベルギー会計制度の研究(1) 評価の基本ルール」(成城大学『経済研究』第168号)
- 「ベルギー会計制度の研究(2) 資産・負債要素の内容と貸借対照表価額(1)」(成城大学『経済研究』第170号)
- 「ベルギー会計制度の研究(3) 資産・負債要素の内容と貸借対照表価額(2)」(成城大学『経済研究』第173号)
- 「ベルギー会計制度の研究(4) 資産・負債要素の内容と貸借対照表価額(3)」(成城大学『経済研究』第179号)
- 「ベルギー会計制度の研究(5) プラン・コンタブルのクラス1をめぐる」(成城大学『経済研究』第182号)

〔分担執筆〕

- 「純粋会計論の展開 J・メイヤーの会計事象観を中心に」(神戸大学会計学研究室『利潤会計と計画会計 会計学の現在と将来』千倉書房・昭和42年)
- 「純粋会計論展開の方向」(講座現代会計第2巻『現代会計と測定構造』中央経済社・昭和44年)
- 「学説展望 現代の会計学説 1.概説 3.チェンパース 7.マテシッチ」(山榎忠恕編『会计学講義』青林書院新社・昭和45年)
- 「第16部 会计学 第1章 会计学基礎論 第2章 資産会計論・損益計算論 第5章 測定・伝達論」(日本経済学会連合編『経済学の動向』

東洋経済新報社・昭和49年)

「フランス会計学説」ほか5項目(神戸大学会計学研究室編『第三版会計学辞典』同文館・昭和51年)

「定額資金前渡制度」ほか6項目(森田哲彌ほか編『新版会計学大辞典』中央経済社・昭和54年)

「フランスの会計制度」(黒澤清編集代表『会計学辞典』東洋経済新報社・昭和57年)

「利益剰余金」ほか10項目(森田哲彌ほか編『会計学大辞典』〔第4版〕中央経済社・平成7年)

「会計学説史(フランス)」ほか5項目(神戸大学会計学研究室編『第五版会計学辞典』同文館・平成7年)

「イギリス連結会計基準とIAS対応」「ベルギー連結会計基準とIAS対応」「EU主要国のアニュアル・レポートの現状分析」(野村健太郎編著『連結会計基準の国際的調和』白桃書房・平成11年)

「フランス会計学説史」ほか5項目(神戸大学会計学研究室編『第六版会計学辞典』同文館・平成17年)

「利益剰余金」ほか10項目(森田哲彌ほか編『会計学大辞典』〔第5版〕中央経済社・平成17年)

「ベルギーのプラン・コンタブル」(野村健太郎編著『プラン・コンタブルの国際比較』(中央経済社・平成17年)

〔書評〕

Jean Meyer: *Comptabilité d'Entreprise et Comptabilité Nationale*, Dunod 1965 (成城大学『経済研究』第24号)

吉岡正道著『フランス会計原則の史的展開 基本原則の確立と変遷』森山書店・平成17年(『産業経理』Vol. 65, No. 3)



斉藤昭雄名誉教授の歩みと著書等

〔新刊紹介〕

中村宣一朗著『会計統一化政策』ミネルヴァ書房・昭和52年（『産業経理』  
Vol. 37, No. 1）

森川八洲男著『フランス会計発達史論』白桃書房・昭和53年（『産業経理』  
Vol. 38, No. 8）

〔その他〕

「理論の遅れ」（『三田評論』第824号）

«Est-Ouest, une opposition toujours actuelle jusque dans le monde du  
commerce» *DARUMA* (Revue internationale d'Etude Japonaise) N° 2,  
1997

〔専門校閲〕

『オックスフォードカラー英和大辞典』全8巻，福武書店・昭和57年（商  
業関係）